

皇朝女子立志編
 千河岸貫一校閱
 上野理一編纂
 卷二

福岡第一師範學校
 (學校圖書)

登錄號	第	號
新神學門		
倫理部		
修養敬訓	婦女訓	項
目	次	
全	冊ノ内第	冊
分類號	第	號
	158.6	

授學館市河高路同願
 158.6
 158.6

T1A1

22

U 45

皇朝女子立志篇卷之二

目次

- 第一 堀部金丸の女幸主家を思ふの切なる事_{二丁}
- 第二 徳永氏能く其夫小事へ事_{二丁}
- 第三 鶴女節を完く事_{三丁}
- 第四 長州萩の藩士某女其夫を擇び事_{三丁}
- 第五 中西淡淵の姉識見あり事_{五丁}
- 第六 桑野氏神巫を擯け事_{六丁}
- 第七 荷田氏民平生小謹慎を加へ事_{七丁}
- 第八 理慧女能く姑小事へ事_{八丁}
- 第九 藪氏の記行雲上に達せし事_{九丁}
- 第十 福島氏子を教ふるに義方ある事_{十丁}

第十一 大婆殿富貴より其初を忘れざる事_{十二丁}

第十二 秋田重信の女貞節の事_{十三丁}

第十三 須原通玄の下婢伊知女壁虎に感ずて夫を

歸事せし事_{十六丁}

第十四 栗女其夫と共に水に溺る事_{十八丁}

第十五 佐璵女夫の病を扶けて温泉に浴せしむる

事_{二十丁}

第十六 伊登女親の心を悦むを以て樂とあせし

事_{二十二丁}

第十七 那賀女先腹の子を愛する事_{二十二丁}

第十八 加賀千代女俳諧を好みし事_{二十四丁}

第十九 文鳳女史の篤學力行並に其壻を謝絶せし

事_{二十五丁}

第二十 後藤氏の妻某賢行の事_{二十六丁}

第二十一 佐々木照元其技を誇らざる事_{二十七丁}

第二十二 仙女惡僧の無禮を咎めて竟に斬殺されし

事_{二十九丁}

第二十三 百合女識見ありし事_{三十丁}

第二十四 貧女衣を佛前にお供して其誠意を表する事

_{三十三丁}

第二十五 孝婦不慈の舅を事へて其志を違はざりし

事_{三十三丁}

第二十六 明智氏難に臨み節を改めざる事_{三十五丁}

第二十七 阿婉刀を揮ふて賊を斃せし事_{三十六丁}

- 第二十八 銀女孝貞の道を失はざる事 三十八丁
- 第二十九 鈴木某の妻衣服頭飾を捐て飢者を救ひし事 四十丁

目次終

朝女子立志篇卷之二

櫻所 干河岸貫一 校閱
 遂軒 關 徳
 有竹 上野 理一 編述

第一 堀部金丸の女幸主家を思ふの切なる事
 赤穂の義士堀部彌兵衛金丸の女に名ハ幸といふものあり。金丸男子あき死にて。安兵衛武庸を養ひ子とあり。幸女死にて之は妻はきんと。未だ婚するにおよむざるうち。主君歿し一藩滅するの大難に遭ひ。金丸父子ハ密かに同志の諸士と。主君の讐を復せんことを謀りけるに。幸女早く之を知り。母と俱に諸國の

神社佛閣を巡歴して其事の成らんを祈りしが既にして父および夫の終は恙なく仇を報じて死するを聞き直ちに江都にゆきて比丘尼となり妙海と號し先侯並父と夫の墓の皆泉岳寺に在るに因り草庵を其墓側にお營み朝夕拜掃して戒行少くも怠るゝとあらば恒は侯家の廢絶せしむ痛み婦女の身あらは雄々しくも之を再興せんことを思ひ闕は伏して愁訴する前後二十五次は及べども到底志の遂げざるを知り乃ち墓前は長明燈を獻して寸志を表し年九十一にして死す

有竹子曰く諸國の神社佛閣を巡歴して其事の成らん

を祈るや猶及ぶへし事の成ると聞て比丘尼となるも亦猶及びがたきにあらず只其侯家の廢絶せしむ痛み闕は伏して愁訴する前後二十五次に至れるは一片忠義の心凝て動まざる所其烈氷霜を凌ぎ其堅鐵石を過るものにあられむ豈能做得べきものあらん是其尋常婦女は高きと一等後世の以て龜鑑とせる所あり

第二 徳永氏能く其夫は事へし事

柳川侯の侍醫友松玄益年三十餘にして惡疾は罹り禄を辭して家は居り病を養ひしが糜爛次第に増して臭氣稍劇しく殊は家の極めて貧窮なりれば婢

僕ともに皆疾く逃去りて之が看護を托するに人あり然るに其妻徳永氏ハ少くも之を意とせば躬親から炊事を執り獨一家の經營を任せて夫に事あるや愈謹めり父母徳永氏の年若くして此不幸は當るを憫み屢勸めて辭し去らめむとすれど更お可からず後ち夫の死をうなれとび哀毀禮は過ぐ喪終りて獨里姑と居り厚く之に事へて婦の道は盡せり

有竹子曰く一たび嫁して節を更めざるハ婦人の美德なり夫の貧窮たり惡疾たるの故を以て之を厭ひ輒ち辭去が如き豈是人情あらんや然るに人情輕薄の今日熱く就き寒を避くる率ね以て常とあり況んや其惡疾の類は於てをや此の澆漓此に至て極るものと謂ふべし噫

第三 鶴女節を完くせし事

鶴女ハ大阪の人鐵屋吉左衛門に嫁し年十六にして夫が亡ひ寡居せり親族相謀り婿を納むんとて百方之を勸むれども終は肯んぜばして曰く妾嘗て聞く烈女ハ二夫は見えぬと況んや先君の遺子もあれむ之を養ひて一生を終るハ是妾の以て聊か先君の事あるの志を全ふ婦の道を盡さんとあるありと族人皆其言の理あるに服し復た之を強ひざりしが廿七歳ありて偶病は罹りて死を其死は臨み遺言して

曰へるやう。男子を以て吾尸と觸るゝおとあからし
めしむ。

有竹子曰く。男子を以て吾尸と觸るゝめどとの一言、
其激ふ過ぐらゝ如しといへども。是又以て平生の守
る所の堅固不拔ある所と證するに足れり。

第四 長州萩の藩士某女其夫を擇びし事

長州萩の藩士何某の家は女子あり。貌甚だ醜黒ある
がため。年長ざれども之を娶るものあり。父母常に憫
みて以爲らく。若媒人あれば。如何は微賤の者たりと
も。之を許して嫁せしむべしと。然るに女は自から配
耦を擇び。妄りに人な嫁を好まば。平生人な語つ

て曰へるやう。妾は瀧鶴臺先生の如き人を得て夫と
せん。おとあからしむ。此時鶴臺といへるは。學博く行正
しきを以て。衆の爲は崇尊せらるゝ人なれば。聞くも
の皆其女の望の分に過たるを笑へり。鶴臺之を聞き。
此女は我を知るものあり。必だ能く家を治めんとて。
遂に娶り妻とあせり。女瀧氏の家な嫁してより。夫は
事ふる柔順し。又能く家を治めしむ。鶴臺も亦
大に之を愛し。事ごとく必だ婦と謀り。婦も亦其見る
所甚だ高く。夫の爲は計畫する。おとあからしむ。皆其道を
得ず。おとあからしむ。鶴臺來客と語る時。常に屏風の外に在て
之を聴き。談話の國政に及ぶことあれば。後より之を

諫め止めしむ。是其國の忌諱に觸るゝまとのあらむ
祇恐るゝかり居るまゝと數年一日事を爲すの間一
個の赤き絲絨團めたる手鞠の如きものゝ婦の袖中
より落たるを見て鶴臺怪しむ之を問ひに婦羞る
色ありて曰く妾の愚昧あか平生事を爲すに過ち多
し故に其過を少くせんおと恥思ひ赤白二様の絲
團を製して袖中におさめ若し惡念の起るときは赤
絲絨添へ結び善念あれば白絲を添へ結びけるに一
二年の際む赤團益大しして白團は多きを加へざる
を以て夫より太く自ら顧省せしかば近來漸く赤白
二團の大相同しきに至りぬされど此全く良人の善

行は見習ふゆゑあらん唯羞らくハ未だ白團の赤團
よりも大なるに至らざるおと恥と言畢りて又袖中
より一個の白團を出して示しければ鶴臺も大に感
ず已も亦彌々其徳を修めけり。

有竹子曰く才徳を擇むべし容色を擇ぶは近世の
俗皆然し是其家道の日に衰頽し就き子孫の大に繁
榮せざるゆゑ人の根柢たるや論を俟たば今某女の
如き能く其飯をんとするを擇び瀧氏の如きも亦能
く其娶るべきの人を得琴瑟和諧一家齊肅獨り當時
の美譚たるのみあらば後世長く之を稱し以て龜鑑
となすに至る洵を得がたき賢女と謂ふべし。

第五 中西淡淵の姉識見あり事

父の讐言を察むるといふものあり。一日來りて中西淡淵は見ゆ時に淡淵の姉寡いて家は在り。之を視て曰く此必らば讐を復さるゝと能わざるものあり。何とあれむ其爪の長く履を置くに整まば斯る細事は。まら猶心を用ゐむ。何を以て。復た大事を爲さず。得んやと。其人後果して讐を復さる。以て事とせむ。烟草を賣て口を餉せり。人皆其姉の識見あるに服せ。有竹子曰く古人云。戸を鎖して些子を餘し。履を置て正しからざる。家を敗り身を亡ぼすの人ありと。今淡淵の姉が某の行ひを一見して大事を爲し得ざる

ものたるを看破せし。全く古人の言に符合し。終に某の讐を復さる能まば。其姉の識見は差まざるに至て。益以て古人の我を欺らざるを知るに足る。夫れ大事は元小事の集つて成る所。小事を輕忽するもの。何ぞ大事を成し得るの理あらんや。世人之は由り少く悟る所あるべし。

第六 桑野氏神巫を擯けし事

小河天門病は罹りて危篤あり。偶々人あり其妻桑野氏に謂るや。某所は神巫あり。貳貫文を與へて之に禱らしめば。立ち癒えんと妻之に答へて。我夫平日淫祀を嫌ふ。因り之を言ふとも必らば從むべし。

一、妾も亦敢て斯るおどろか爲を好まじ。若し外は神
藥の病と治るるに足るものあれば、則ち衣服を典し、
器物を賣て之を求むるも惜むとおろしあらざれば、
請ふ幸ひふ教へられよといひられむ。其人愧て退け
る。

有竹子曰く、女子の愚痴ある。吉凶禍福を祈るや、皆神
佛に頼まざるなく、神佛の外は敢て天下の大道理と
いふを知らざるが如きのありさまある。古往今來
皆然り。若し其眼を神佛の外は着け、豁然信じて疑を
ば、確乎守つて迷わざるものあれば、之を稱して女中
の英雄といふも可なり。只世間此流の女子を悲

しむのみ。獨り桑野氏の如きは、其或は之に庶幾から
ん。

第七 荷田氏民平生の謹慎を加へる事

荷田氏民は祠官の家に生長し、而して外神は瀆れど、
其居佛寺と隣るといへども、未だ嘗て往き謁せざ。長
じて江都の某氏に嫁せしが、幾となくして夫を喪ひ、
和歌を善くするが以て、紀の女公子は仕へかど、後
は仕を致して去り、小廬を淺草に結び、風月を友とし、
て自から樂みけるに、諸侯夫人女公子等其名を聞き、
延き見て業を受くるもの甚だ多く、中に就き土佐侯
姫路侯岡侯の如きは、尤も之を禮待せらる。其性多病

まゝて常に病牀に在り。雖も容飾をせられれば決して人を見がかにあり。平生親み狎るものといへども。竟に其病患あるを知らざりといふ。

有竹子曰く。人を觀るは其大ある所より於てせざる。其小ある所より於て見る。小あるものにして苟も觀るべきとれたる。大あるものゝ觀るべきや論を俟たず。荷田氏が病牀に在るといへども。容を飾らざれば人を見ざるが如き。其平生心を用うるの密にして至れる。之より由て其他の大ある所のもの亦推知をべし。況んや女子の尤も謹慎を加へて注意をべき外面の事。容飾に在るとや。以て荷田氏が人とありの如何と判定するに足れり。

第八 理慧女能く姑事へ事

尼ヶ崎侯の臣齊田清兵衛の女理慧は江都に生れ。後に杵築侯の臣山本安兵衛に嫁し。未だ數年あらば。早く夫を喪ひ。これに他姓の子を養ひ繼嗣と志す。其子放蕩無頼を極めて。遂に家を脱出したるが爲め。山本家も一朝亡滅に至りたり。姑某理慧女といへるやう。一家の不幸に此より及び。事已に爲るべきあり。依て我を將きに郷里に皈りて。親舊の家に依らんとす。只汝は年猶若きが故。更に再嫁を圖るべし。と理慧女之を聞き。潜然涙を流して曰く。妾も固より愚昧な

りといへども一たび人の家へ嫁して復た他へ之くの念慮あり。殊に尊姑の年已に老いたれば先君お代りて之を護視するは即ち妾の職あり。道の遠近を問ふは事の勞逸を論ぜば尊姑の之く所命あるところ。只是従ふべしとて數々之を喻せども聽かざりて姑と俱に邸を出で北郊に棲居して親から薪水の勞を操り姑を養ふと三十年猶一日のぶとく奉事益篤きを加へり。杵築老侯其貞淑を聞き近臣岡田匡隆と遣はし勸めて夫人氏を仕へめんとせられしほど。理慧女固く辭して曰く妾の邸を出るや己は自から人間を棄つるを矢へり而して又一日も姑の側を離

るに忍びざるありと。尼ヶ崎侯も亦之を召せども同トく辭して曰らく亡夫の事ありとあるの君は於てもら猶且召命を辭せしほどあれば幸ひは鄙意の在る所を諒察あらんと。妾が今日の身は姑は事ふるの外に復一も求むるところなきありと。岡田杵築は反りしを親友に見るおとふ。屢理慧女の事を語り其貞節を稱して泣きり。

有竹子曰く女子の軟柔ある元より男子は頼て事成るものありといへども亦自から獨立の志ありるべからざるあり。然るに近世の女子は視るに柔は安んずるものは卑屈を是守り一はも二はも男子の願

使は供へ己を自から起つゝと能まざるものゝ如く、又剛は過るものと泰西の遺傳ある男子同權の謬説を唱へ、遂は其夫を蔑視して、牝雞の晨を致さるもの、往々之あり、共に未だ其中道を得ざるあり、知らばや女子に貴ぶ所は卑屈はあらば、教慢はあらざる、只個柔にして貞あるはあり、柔あれば女子の徳以て完く、貞あれば一家の事以て修まる、理慧女の如き、其之は庶幾からん。

第九 藪氏の記行雲上は達せし事

肥後柏家の母藪氏、年已に六十を踰えて、遠く京師へ遊び、或日太上宮人の媼は會ひて、端なく相懼び、旅中

作る所の船路記一卷を出して之を示せしに、媼は以て宮人の上つり、宮人之を太上に上つる、以て乙夜の覽は供せり、其將さに郷は皈らんとするとき、宮人命じて曰らく、既に往路を記せば、還路も亦記あかるべけんや、成れば速に之は上つまじ、既に皈りてのち、記成りて之は上つり、復た覽を賜ふこと初めの如く、一時傳へ稱し、以て曠代の奇遇と爲せり。

有竹子曰く、下賤の身よりて且婦女子たり、然るに一卷の記行高く雲上に達し、以て乙夜の覽は供るに至る、豈は尋常人の能く及ぶ所あらんや、一時稱して曠代の奇遇と爲るも亦宜あり。

第十 福島氏子に教ふるに義方ある事

尾張の國老成瀬氏の臣成田喜和の妻福島氏に年十九して此家は嫁し廿五して夫死す。其後寡居して舅を奉事し子撫養し家事を治むること各其宜しき失ふべし殊に子喜起に教育するや甚だ嚴かに文武の藝皆名師に就きて學ぶ。平生口を淫靡の歌曲を唱へ手に絲竹を弄ぶこと禁止し己の性甚だ雷を畏るれど子の視て其怯み慣むんと恐れ雷鳴おとに必らば端坐襟を正しく少くも畏怖の態を爲さば喜起の年二十に及び始めて使番を任せられ江都に祇役せんとする時其幼して父の後を

兼け祿減し家貧しきが爲は行途の費の給がたき我恐るるの色あり福島氏容を正しくして曰へるやう汝は先人の餘慶に因り乳哺の中に家を襲き竟ふ今日に至るおと成得るべし皆是君恩にあらざるにあらず其萬一ふ報をべきの時ふ當り固に貧窶の故を以て踟躕をべきにあらず乃ち衣服器用に至るまで霜を傾けて之を給し躬に垢衣を衣て蔬食を食し益喜起を勉勵し一日も家を怠息せしめば喜起も亦能く母の教を體して拮据事を勤めたるに似り遂に先騎隊長に轉じ目付に遷り祿百石を加賜せられ始めて祖考の舊祿四百石に復すること成得たり夫より

目付の職は在ること十八年、進みて政府の司儀は拜し、其禄八百石とあれり。是は於て喜起大は悦で曰く、今よりして後、厚く母に奉むるおと心得べしと。福島氏之は聞き曰く、我の能く汝を成し、此に至るべし。悉く君の恩澤あり、汝の能く父祖に兼け、以て此に至るべし。盡く汝の勤功あり、我は於て何の力やあらん。汝は唯之を繼ぎ、失ひ墜れ、ことあらねば、我の願足れり。或は飽食煖衣、徒らに君の賜ふ所を虧き、以て己は供むるが如きは、我の甚だ安んぜざる所ありとて、終身其素志を易へば、天明丙午年六十九よりて歿せ。

有竹子曰く、女子に憂ふる所は、獨り姑息の一事に在

る。而して其尤も姑息の害あるもの、ハ子を育むるの處は在り。今や福島氏の子喜起に於たりや、能く此弊を脱せり。否脱するのみあらば、之に教ふる一々義方ありて、男子も決して及むざるとある多し。喜起の他日、官に進み、禄を累ぬる、皆母訓の然らしむるものか。世人は之に由て、益々庭訓の已むべからば、母教の忽せにをべからざるを、我知を。

第十一 大婆殿富貴よりして其初を忘れざる事
大婆殿と呼べる老嫗あり、徳川二代將軍の乳母たりしが、現在の身分たるにも拘むるべし、毎月例は一二回一般の奴隸、輿僮、其臺所は招き、親から飯を椀に盛

りて、之に饗せらるゝを以て樂みとせり。一日偶、本多佐渡守來り、此有様を見て大に驚き、大婆殿に、多くの侍女もあるとあれむ、宜しく之に命じて爲さむべし。何ぞ身親からるゝに及むんやといひ、乃に大婆殿將は盛らんとする所の飯を地へ置き、杓子を止めて佐渡守に向ひ、近日人ありて、汝の驕奢頗る甚だしきを傳ふるものあれど、未だ容易に之を信ぜざりしが、今ふして始めて其言の虚あらざるを知るあり。抑も汝は曾て彌八郎たりし時の事を忘れたるや。妾の如き元三河は生きて、鄙賤の家は長し。圖らば今將軍の乳母とありしを以て、幸にして今日の榮華を得

るといへども、顧みて三河は在りし時の身と思へば、僅か五人七人の客を招き一飯を供ふることも能わざりしに、今や却つて此の如く、許多の人を饗せしかを得るに至りしに、實に喜ぶべきの極といふべし。然るに汝は獨り富貴するに、初を忘れず、所を感ぜざるのみあらば、猶之を止めむとて、何ぞや汝の如き不所存あるものを、樞要の政務に與らむるに甚だ危ぶむべきの至ありといふれむ。佐渡守は復た一語を發する能はず、赧然として立去りけり。

有竹子曰く、富で貧しきを忘れ、貴くして賤しきを忘るゝとき、其國以て亡び、其家以て衰ふるは、理の固

に然る所あり。大婆殿の節儉其本を忘れざる。即ち家
康公の薰陶に出で、二代將軍に遺傳し、以て徳川氏の
長く繁榮を享くるの根柢をあるものと謂ふべし。

第十二 秋田重信の女貞節の事

武藏の人秋田重信の女某、年十六よりて古河侯の臣
原恭胤に嫁し、居る一年あらずして舅歿し、夫恭胤も
病よりて官を辭せられども、允されざるが爲め、數請ふ
て己まがりしかば、是を以て罪を得、禁錮せらるゝ。お
よ一年餘、終に禄をも奪されたり。曾て或時某女、既り
父母を省き、母を謂ふて曰く、先は汝を原氏の子に
嫁せしものは、其才智勝れて品行正しく、且二百石の

重禄を有さればあり。然るに其世を繼ぐに及び、禄の
半減せられたるも、實は心外の事あれど、百石の禄
猶以て飢寒を支ふるを得べきを爲姑く之を忍びし
に、今日其仕を辭せらるゝといふに至ては、將た何より
衣食の計を爲さんとせらるや。飢寒前より迫り窮困已に
至らんとし、此の如き人に従ふて長く艱苦を嘗めん
より、寧ろ離別して他を嫁せらるゝに如くはありと、女之
を聞き、潜然涙を流し、徐かに答へて曰へるやう。抑も
我母よりて此言あるも、妾を愛せらるゝの深きが爲
めあるべしといふと、雖も曾て之を聞く、烈女ハ二夫
ふ事へばといへ。其艱難辛苦に遭ふも、敢へて貞操を易

へぶるの謂ひあらむ。今や夫は妾を棄てて、妾如何んぞ。女子の節を忘れて、自から去るを求むべけんや。且禄あれば嫁し、禄を失へば離る。不義之より大あらま。假令再び良家に嫁して身は錦繡を飾り、口膏梁に飽くとも、豈不義の人とあるに忍びんやと。母も亦其志を奪ふこと能わざれば、猶時に女の貧窶の状を憫むのあまり、睽離せんこと、我勸めて止まざりしかども、女は堅く守りて、きかむ夫も事ふるや益慎み。夫の世は終ふまで廿八年の間、一日の如く。又其姑も侍るや、孝養備ふに至れり。故に初め江都に赴き居を卜る時、比隣の人相評して、原氏の母と婦との情

愛厚き想ふに、必らば主人は養子として、婦と母とを眞の親子とらん。否らむんむ何ぞ心盡むの彼が如くあるべけんやといひしほどなれば、此一事を以て亦平生を知るに足れり。初め夫恭胤は従ふて故郷を去らんとも、や涙を揮ひ神を祈りて曰く、願くは妾の命を奪ひ、父母にして永く其世を同トくまあら相見ゆるに期あきを憂へしめざる人おと然るに東都より來り、恭胤は復た官仕の身とありければ、是より後數父母に見ゆるを得、父母も亦先は女に勧めたる言の誤りしを自から悔るに至れり。夫は義を重んとて、夫を敬し、姑も事へて孝養を盡し、貧苦の中に

在りて更ニ意とせざるの貞節此の如くあるを以て、
其生む所の子も亦學に深く、後ニ厚祿を受け家の富
優あり。父祖の時ニ超ゆるに至り、此女の與つて
大に力あるなり。

有竹子曰く、夫れ熱ニ就き冷ニ避くるは人情あり。母
の愚痴あり、其女の志を奪ひ以て他ニ更め嫁せしめ
んとするや、固より怪むは足らば、只此間ニ立ち、確乎
貞節を守て變ぜば、懇ろに母を慰み、厚く夫ニ事へて
終始一の如き之を能く婦道を全ふて、間然する所
なきものといふべし。

第十三 須原通玄の下婢伊知女壁虎に感ずて夫

に歸事せし事

天保年中、幕府の醫官須原通玄といふ人あり。或時其
家の板壁を鑽りて窓を作らんと、工人の板を取除
くるに及び、中に長七八寸餘の壁虎の釘よて、其腿を
貫かれたるまゝ、猶死せざるを見、蓋し往年工人の
板と共に之を釘よて打貫きしものあるべし。家人等
集り見て之を怪み、如何に其急所を避けたるをも
せよ。年久しく此間ニ在りて、食物を得るの道さへあ
きに能く活きたるは不思議ありと評し合へる處へ、
又一の壁虎あり。偶蜘蛛を含み來りて、之に食けしめ
たり。其雄ありや雌ありや、其判を可らざれど、必其

匹偶ありとは知られたり人々始めて其死せざる所
以を審み感して曰く夫の壁虎の物たるや狀頗る
醜くして惡むべきが如くおもしろも己に定まれる匹
耦あり餌を求めて之を養ひ以て今日に至る何ぞ其
情の厚きやとて速に釘を抜き之を放ちしに壁虎は
雌雄相從ひ欣然として去りたり時此家の婢女伊
知あるもの最初より立て俱に縦觀せしが泣て主人
に向ひ急に暇を請ふ主人怪しみて故を問へむ則ち
曰く妻先よ人に嫁して居るおと一年夫偶惡疾に罹
れり因て婚を絶んおと我請へども許されず妻の終
に己む我得て之を棄て去りしが今や此二蟲を見て

大に心お慙ぢ且恐れ冷汗の背お冷きと覺えど始め
て夫婦の道の尤も重きを知れり願くは今より飯り
て前過を謝し長く夫の湯藥に侍して人たるの道に
背かば畜類におも若かざるの責を免れんと主人も
其志を感して即ち之を乞ふ婢歸り父母に乞ひ媒人
お就て罪を謝し情を白け夫嗚咽して曰やう吾疾は
深く骨お達し髓に入り吾猶自から醜とおもるほどお
れば人より之を視て堪ふべからばとおもるや宜べま
り故に彼若し先に婦たるの道を盡せば吾亦固より
謝して遣らんとするあり然るに彼其道は由らば
て自から去らんことを求むるが爲め枉げて之を拒

みいぐ。今既ニ悔て來る。此の如くおれば。吾復何を
怒り何と不怨みん。請ふ改めて之を去らんと。即ち休
縁書を製して之を與ふ。伊知涙を拭ふて曰やう。果
て然らば亦詐なり。休縁書を求むるが爲め來りしに
嫌ありて。妾の志よりざるありと。固く請ふて漸く
允され。歸養をること一年より。夫終る死せり。其後
舅姑の事へて孝養お怠りたり。けり。只憾むらく
は伊知の郷里と父母の名を詳とせむ。

有竹子曰く。物は觸れ事に應じて。自から感情を起
もの。是人情の免ざるどころあるが故に。平生
留めて之を接せれば。事々物々皆學問の種子と

あらざるはふく。又勸善の裨補たるにあらざるは
豈獨り伊知女の壁虎に感ぜり。事のみにあらむや。

第十四 栗女其夫と共に水に溺る事

甲斐の國は栗女といへる女あり。同國田中村の農夫
某の娘あり。幼よりて父母を喪ひ。村長某の家に育は
れ。村長其人とありを愛し。資粧を與へて。同村農
夫安兵衛に嫁せしむ。栗女嫁して未だ幾くあらば。夫
安兵衛惡疾に罹りて。恒に枕を就けり。栗女之に事へ
て。聊を厭ふの色なく。晝は夫に代りて田を耕へ。夜
は夫の看護を心盡して怠らば。餘暇は紡績の業
を爲して。藥餌おとび。薪炭の資料とを以。舅六右衛門

年既に七十を過ぎたる老人あれば、其野は出て遊ぶ
ごとに、栗女必だ湯茶を携へ往て之を省み、遠く出て
晩く歸れば、必だ村外は出て之を迎へるのみぞ。村人舉
つて栗女の貞きこと孝あるを嘆賞せざるものな
かり。然るに或年の秋七月八日の事とかや、暴雨濺
くが如く、曉來頻り降續きて、川々の水大に漲り、夜
半に及び、堤防壊れて、今や洪水の將きに至らんとす
るの勢ふれど、悲泣哀號の聲四方に徹し、慘然の情聞
くは堪へざるあり。此時安兵衛の病益劇しく、手足糜
爛して起つゝと能くば、乃ち栗女に語りて曰く、我を
水に死さば、汝疾うに難を避け、汝は多年我を醜

とせど、湯藥に侍り、力を看護に盡すの勞死すといへども忘さざるあり。今父も老たり、汝は年少し、幸ひもして命を全ふし、家を存するの道我圖り決して我を以て念とかけ勿き難疾の此身、水に死なれば却つて幸ありと、栗女泣て死生を俱ふせんことを請ひ、語未だ了らざるうち、水已に門外に至り、後るものも死を免れずと呼ぶの聲太だ急なり。栗女乃ち舅を扶けて出で、其副衣と田地の典券と紙を包み、併せて之を入し、枕を舅栗女を顧み、汝夫と共に來る、然らざれば我獨活さざるありと、栗女謹で諾し、返りて室に入り、夫の側は坐し、天を誓ふて夫と死を同うせ

んと。既。り。て。水。至。り。終。に。共。み。溺。を。死。を。村。民。皆。栗。女。の。志。を。感。し。各。錢。物。を。出。し。て。爲。め。其。眞。福。を。修。め。事。官。に。聞。え。て。黃。金。若。干。或。六。右。衛。門。に。賜。ひ。且。栗。女。の。碑。を。立。て。名。を。不。朽。と。傳。へ。む。

有。竹。子。曰。く。生。て。苦。樂。を。偕。し。死。て。穴。に。同。う。ま。る。は。婦。の。道。な。れ。ば。生。死。必。ず。夫。に。隨。ふ。或。定。則。と。な。れ。と。い。へ。ど。も。時。宜。ふ。由。り。亦。必。し。も。然。ら。ざ。る。所。あ。り。栗。女。の。如。き。も。傍。人。よ。り。之。を。視。れ。ば。猶。他。に。處。ま。る。の。道。な。き。と。い。ふ。べ。く。て。其。夫。は。徇。ふ。て。死。ま。る。や。稍。遺。憾。と。い。ふ。の。點。も。あ。ら。む。然。れ。ど。も。當。時。の。執。を。以。て。之。を。考。ふ。に。蓋。し。事。の。此。は。出。づ。る。或。得。ざ。り。と。あ。る。べ。

く。能。く。栗。女。の。心。を。推。し。て。察。ま。れ。ば。亦。大。に。憫。む。足。る。もの。あ。り。て。未。だ。妄。り。に。勿。々。の。判。定。を。下。ま。べ。か。ら。ざ。る。あ。り。

第十五 佐璵女夫の病を扶けて温泉に浴せしむる事

佐璵女は常陸茨城郡蘆沿村の民伊平太の妻なり。伊平太家貧しきより。一は濕瘡を患ひて起居自由ならず。佐璵晝夜心を盡して之を看護し怠らざれども疾更に癒えぬ。而して一家の貧困益々至り。佐璵此間に在りて冬月極寒の時裡。まきの鶉衣を着し垢きたる面。亂れたる髪。夫の便溺を承け。夫の痛癢を察し。傍

らに穉兒を養育し備さに艱苦を嘗めり。伊平太一日
佐璵と語り曰やう。我命ハ已に旦夕に迫れり。汝我を
随ひて俱に死せんより寧ろ改めて他を嫁するに若
かばと佐璵聞て潜然涙を流し妻已に身が良人許
にたがうべは假令窮して死なむと敢て其節を易
へざるありといふて可からず。此より奥州巖城の温泉
あり諸瘡を患ふるもの一浴すれば神效あるより我
聞き佐璵乃ち之を浴することを勸め里人より乞ふて
一草車を造る其狀椅子の如く大に僅に身が容るし
ばかりよりて下に四の小輪を施し病人をして凡に
隠り坐せしめ佐璵自から一兒を抱き又一兒を負ふ

て之を挽く然るに巖城の温泉は茨城郡を距るあと
甚だ遠く途中寒氣の爲めに手足胼胝し血流れて淋
漓なるも更に意をせざ路の嶮峻進みがたき處に至
れば天を仰ぎて哀み號ぶ路人其情を憐みて助挽く
ものあり十七日を經て漸く温泉に至るを得留り浴
する十日餘瘡稍瘳る有り事水戸府に聞えて其貞節
を嘉し租税おとび丁徭を免ぜらる。

有竹子曰く常は錦茵の上にお坐して膏粱の食を飽き
放肆奢侈至らざる所なく世に飢寒の困苦あるま
たは知らざるものは宜しく佐璵女が千辛萬苦の状
を寫して座右に置き以て平生の戒をあらはべし。

第十六 伊登女親の心悅ぶを以て樂とあせ
し事

伊登女といふものあり。若狹三方郡早瀬浦佐左衛門の妻あり。舅姑ふ事へて孝心深し。然るに姑は先死し。舅年八十あまり。老耄し。て常に伊登女を責むるは非理の事。以てするといへども。敢て之を逆ふ。おとなく。柔順其意を奉む。一日伊登女外より飯る。時に老人藁を撒いて。幼孫と戯ふる。何を爲るやと問へば。子産むまねいて遊ぶありといふ。然れば吾も子産産まん。いで又藁を持來り。同く戯るれば。老人も興に入りて。大に欣べり。其他の奉養亦之を推して知る。

べし。曾て一夜深雪軒を壓さるの時。當り。老人茄子の羹を食はんといふ。伊登女輒を肯ひ。近邊の某寺に走行を。糠漬の茄子を求め來り。水漬して塩氣を去り。之を羹にして進む。又一年嚴冬の候。鮮魚を求む。時は海暴れて。漁甚しく。急に如何ともあまべからざれど。猶百方かを盡して。之を得んと欲し。門を出るに。偶魚あり。脚下に落つ。伊登女天を仰きて喜ぶ。おと限なく。即ち携飯り調理して之を進む。蓋し此時鳶の魚を攫み來りて。屋上は在るもの。誤て其魚を落して。飛去るありと。孝心の厚き終に國侯は達して。米若干を賜ひ。且つ家乃租を免ぜらる。

有竹子曰く昔、老萊子ハ五色斑斕の衣を着て小兒の戯を爲し親の心を悦ばせ以て樂と爲さざりし時の人皆其孝を稱し之ヲ二十四孝の一と加へて今に兒女子も亦能く知る所あり伊登女の事暗く之と合ひ而して其孝心の厚き老萊子不過ぐるものあるがごとし。

第十七 那賀女先腹の子に愛をさる事

近江蒲生郡古市子村福永某の後妻那賀女は此家と嫁してのち先腹の子二人ありんかとも厚く愛養をなす。吾生む所の子に十倍も然るに其生む所の子は十餘人ありんか之が爲は先腹の子は接するや自然と

疎くあらんと恐れて男子ハ七八歳と及べば父に勸めて出家せしめ女子は悉く京師に遣はして人家の婢とあり敢て一人をも家に留めず此の如くあらんかゆゑ先腹の子も亦其慈愛を羈されて至孝あり兄と家系繼ぎ妹ハ彼實子の皆外に在て婢とあり義理と思ひ己も同く京都と出んことを請へども許さず強ひて之を隣村と嫁せしめたるは是亦深く繼母の恩を感ず常に歸りて起居を問ひ曾て怠るおとなく先に出家せしめたる實子後各一寺の住職とありんかれむ交るく母を迎へて之を養はんといへど那賀女ハ實子の愛をひかされて先腹の子の傍に在

るに厭ふとの嫌を來ふを以て更に之を肯んぜば其賢あるを此の如くなれば名遠近は聞え時の人皆嘆賞せざるは

有竹子曰く那賀女が偏愛の嫌を恐れて其實子を遠ざくる稍其太甚きも過るが如くあるも之は世の先妻の子を惡みて蛇蝎をあらざるの擯斥を加へ復た義理の何物たるを知らざるものなれば其優劣果して如何ぞや況して其實子と繼子の一家は同居するあれば早晚釁隙の其間を生むるまきを保てべからざるは於てを那賀女が之を未然に防ぐ其意を用うる所密あり

第十八 加賀千代女俳諧を好みし事

加賀千代女といへるは加賀國松任の人なり幼より俳諧を好みども未だ其師を得ず之を人に問ふて美濃の盧元坊と稱する人ある此道の名手たるを知らず就て學ばんとあるとき恰も好し元坊の行脚して其國に來る會し直之は旅舎に訪ふて教を乞ふ元坊時は太だ草臥たりして寐てありが千代女の志を聞き然れば一句せよといふ初夏の頃なれむ時鳥成題とあり頃て一句を吐きたるは元坊其尋常あるざる氣韻を見て其句をけがすは是れ誰も作し得る所ありといふ既して又一句を吐けど是亦

同トく肯むざりあゝ初の如く元坊も己に眠れ就けども千代女は猶去らざる獨坐沈吟し其眼の覺めたるを窺ひて又一句を問ふ斯くて數句も及べるうち終る曉天に至り元坊起きて終夜去らざりふや夜は明たりやと驚く時千代女をばとぎを郭公とて明なりといふ大に賞し是也々々汝他日此意地を忘るゝあゝおけれむ名天下に揚らんとして師弟の約をまぜり後果して女流は珍らしき此道の名人となり其句人口に膾炙するもの多き中にも廿五歳にして夫に訣る時起て見づ寐てみつ蚊帳のふるさかゝるの句尤も世人の能く知る所なり一人の男子あり

之も夫の後を繼ぐめ身へ尼となりて生涯節を全ふて終れり

有竹子曰く俳諧の如きは固より遊戲の末枝あり敢て稱すべきは阿らざれども其終夜去らば以て終る師の心は獲るに至る耐忍不撓の氣力は大に多しとるに足るものあり宜あらざる其名世に傳はり今も嘖々人口に膾炙して衰へざるや

第十九 文鳳女史の篤學力行並に其壻を謝絶せし事

江都麴町高島彌兵衛の女某文鳳女史と號し幼より聰慧して文雅を好み佐藤一齋の門に入つて經業

を問ひ。詩文を學ぶ。傍ら書紙善く。又茶儀を習ふ。時の諸侯延きみて其講説を聴くもの多きあり。尾州紀州の兩侯へ尤も之を寵愛せられたるなり。其名都下に振ひ。男女子弟の來りて業紙受くる六百餘人。に至る。此頃林大學頭幕府の世儒とありて。全國の文柄を司どり。容易く女子の贄を執るを許さざるが。獨り文鳳の篤學力行を賞して。門籍を登るを許しけるは。當時稱して非常の榮譽とせり。父母曾て文鳳の爲に壻を納むるを。文鳳謹で之に事へが。一日樓上に在て宴を開き。既了りて。文鳳は膳を捧げ徐々下らんとするとき。誤つて脚を失し墜つ。壻偶樓上

より見て問て曰やう。器物を毀たざり。と。文鳳少く不平の色を爲して曰らく。宜く第一は妾の身の損傷を問ふべきに却つて瑣々の器物を問ふ。何ぞ其問を失ふの甚きや。妾ハ斯る無情不仁の人。に伴ふを願むが。ありとて。すまじき父母に請ひ。遂に婚を絶ち。終身復嫁せざ。齡六十六にして終れり。有竹子曰く。人を傷けざるやといひて。馬を問む。より。は。孔子の廐焚たるとき。歸つて急な家人を問ふ所。即ち人を愛して獸を賤むの理。當きに此の如くあるべきなり。今文鳳が壻の言。全く之に反して。其輕重をる所を失ふ。亦其人の頼む可らざるを見るに足れり。文

鳳の之を絶つや固に宜あり。

第二十 後藤氏の妻某賢行の事

徳川幕府治金局の士後藤氏の妻某賢行あり。其夫は妻あり。尤も寵愛せらる。妻之は接するふと死も姉妹の如く。衣服飲食に至るまで皆已と同ぐく。數年の間少くも渝らば。其のち妻病人で牀に卧し。數日愈えば。或時妻の自筆に係れる紙片の机邊に翻り。其夫見て何心なく拾ひ上げ。之を讀下る。即ち今戸某といへる巫祝に囑して。其妻の死を呪詛する所の書翰ありければ。其夫大に驚き且怒りて曰やう。吾妻年來之は遇ふもや甚だ厚し。然るに彼其恩を忘れ。斯

の如き事を爲す。我も亦深く妻に對して耻る所あり。一日も我家に置くべからばとて。之を妻に告げ。急は妻を放逐ささんとせしに。妻病瘳し卧しあがら。潜然涙を流して良人とは謂へるやう。愚かか。婦女の心といて。世間或は此の如きものあるべし。獨り彼のみにあらず。かあり。殊に彼は年久しく奉仕して。勤勞を積み。今之を放逐すれば。將た何處に往き。誰人に寄るべきや。飢寒目前に在りて。實に憫むべし。寧ろ懇々教諭して。自から其非を悔めしめ。産を其所生の子某に分つて。母子俱に淺草の市店に居らしむる。是吾一生の願ひありと。其夫を去る。ち妻の言に従ひ。兼て淺草

は在る吾店を與へて之は居らるめける。

有竹子曰く。婦女子の小量ある。或は妻妾相容れず。て一家の内は疾視。之が爲め閨門脩まらば醜。嚴外は聞ゆるもの。世間滔々皆然り。今妻某の如きは。毫も妬氣なきのみあらば。能く徳を以て怨に報い。慈愛の心仁恕の言。讀者をして爲め感動せしむる者あり。豈復賢婦と謂わざるべけんや。

第二十一 佐々木照元其技は誇らざる事

照元といへるは佐々木志津摩の女あり。高倉家の臣粟津信濃之助に嫁し。夫妻伉儷甚だ篤く。家事に拮据する。おとし廿年。其間未曾て一の過失あらば。後は家道

頗る窮窘。然も夫信濃病で床に就き。命已は旦夕に逼れり。一日信濃泣て照元を語るや。我死せむ。卿獨り家を支ふるおと能わざるべし。去とて尼など様替て。淺猿く世は落魄せむも。我心は安んぜざると。おろかれ。吾喪の畢るのち。更に嫁して一身の安樂を謀らんこそ。吾お於ても魂魄長く安かるべけれ。照元之を聞き。涙を拭ひ。あら。良人幸に憂ひ賜ふ。勿れ。妾は幼あるとき書を父に學び。略其形似を得たれむ。拙といへども。一身の餬口を爲さふ足るべく。必だ江湖に零落して。良人を辱しむるが如きに至らざるありといへば。信濃も大に悦び。晏然として目

と瞋せり。是より照元は自から貞操を勵み書を以て子弟に教授せしむ。名聲日々顯むれ。貴人勢家も往々其門に入り。皇女寶鏡寺尼宮も亦贊を執り賜ふに至り。能書の名今に嘖々として人之を稱せり。

有竹子曰く。世の婦女子を視る。纔に一技一藝を能くすれば。則ち以て自から負ひ得々の色。揚々の言。妄りよ人々輕視するものあり。之が爲め遂に人に厭はるのみあるべし。或は婦女子の技藝あるは。其婦道を守るの勝るに如く。寧ろ無技無藝として。温順貞淑を守るの勝るに如く。といはる。嗟乎。是誰の罪ぞや。世の婦女子は常々照元が其技能を矜らば。

て。夫の臨終に至り。始て己の善書を説くの事を見て。之を標準として。謙遜自ら持せば。又貞淑の婦女子たるに庶幾からん。

第二十二 仙女惡僧の無禮を咎めて竟に斬殺されし事

信濃國更級郡今井村の農宇兵衛の妻仙女といふものあり。宇兵衛癩を病みて久しく床に臥し。百方手を盡すとへども。更に寸效を見ず。仙女日夜湯藥を侍して。介抱至らざるとあるふく。備さに艱苦を嘗めり。時は僧慶山あるもの東京より來り云ふ。我の麻布谷坊妙像寺僧慶己の弟子として。祈禱を善くし。病を癒

まこと神の如くと、仙女夫の病を憂ふるのあまり、其言を信じて之を吾家に延き、其平癒を禱らむるゝと數十日は及べり、然るに慶山の仙女の容美くして心艶あるを見、心私に悦びて、頻りに之を挑むといへども、仙女更に肯はむ。慶山已むを得、勢を以て之に迫り、強ひて其事を遂げんとあり。或時白刃を示して之を脅かす。曰く、若余の言に従ふざれば、汝を斬らんと。仙女從容として其非を辨へられど、慶山猶省みざりて益迫まり、仙女已に堪ふべからざるを以て、輒ち口を極めて大に罵り、其無禮を咎む。慶山怒り終に仙女を斬殺して走る。長野縣吏捕へて之を鞠問し、審ふ

其實を得、事朝廷に聞えて、明治五年金七十五圓を賜ひ、以て其節烈を旌表せらる。

有竹子曰く、仙女は信山の僻地に生長し、何の教訓ある所あつて、其節の烈ある斯の如くあるや。近世士大夫の婦女教訓なきにあらざり、而して猶節義の何物たる哉。知らざるもの多し、教訓なき信山の婦女にして、其節已に彼の如く、之は反する士大夫の婦女にして、其行偶此の如くあるとき、教訓も亦遂に其用を爲せしむるあり。否、信山の婦女は之を天性に得るものなり。士大夫の婦女は之を教訓の方を得ざるに失するものなり。苟くも教訓其方を得ず、何ぞ曾て彼の

如きおとろく人や況んや天性の美之に加ふるに善
良の教訓を以てすれば其造詣を所測るべからざ
るあり。

第二十三 百合女識見あり事

寶永年中京師に阿穀といへる女子あり祇園華表の
南側に茶肆を張り常に和歌を善くし一女を養ひ名
を百合といふ百合其母の爲を所を習ひ亦和歌を喜
び日は茜裙を着けて茗客に供し間暇あれば輒ち
筆研を手にし花香鳥語觸るに隨ひて題を入らざ
るあり平生甚だ粧飾せざれども天成の麗質楚々人
を動かす都下の少年子弟意を屬するもの多し然る

に百合毫も之を顧みず時徳山某といふものあり
元幕府士人の子あれども事に因て都下は流寓し落
魄極つて自うろ口を糊する能はず百合之が爲に心
力を竭して扶助し遂に之と相暱み孕むとあつて
一女を生めり其頃徳山氏の宗家嗣絶えたるを以て
族人相議し某を取り之を繼ぐめんとも輿馬を具へ
て來り迎ふるに會ひ某則ち百合と供を歸らんとを
るに百合肯はざして曰く妾の郎君に侍る已に十
年一旦相離るゝ極めて情を爲しがたし然りとい
へども今や晝錦婦人を携へて歸る恐らく人の指
目を招かん殊に妾は路傍の楊柳固より郎君の攀折

一堪へむ。宜しく別良閨を擇び、以て琴瑟和諧の道
を謀り給ふべし。即ち郎君の名譽を全くせむと云ふ
ふりと。某猶之を要して曰く。吾の客土は飄泊して幸
ひは飢渴を免れ今日あるが致しもの。皆卿の力に頼
る。然るに一旦富貴ありて糟糠を棄る。余の心に於
て忍びざるありと。百合益固く辭して聴かざる。由
り。某をふもち己を得ず。生む所の女と携へ去らんと
するに。百合又辭して曰く。郎君少壯更は新人を伴ひ
給へば。前途多福。益々斯振々の慶ぶきを憂ひば。妾既
は郎君を辭せれば。誓ふて他夫を見えば。獨り青燈を守
りて。此兒を撫養し。之を視る。猶郎君を見るが如くせ

んと。然るに是をも併せて附。去らる。ときハ何
を以て日を送るべきと。某も又深く其情を察し。遂
は之を捨て去る。百合是より固く節を持し。一意幼兒
を撫養し。以て其長むを待ち。常に之を謂へるや。汝
の父は士人なれど。汝其身を珍惜し。自ら輕視を
するなれと。女既は長じて亦才情あり。爲め佳婿を擇
べども。意は適ふものあり。時は池生あるものあり。眞
葛原に住み。書畫を賣て生活を爲せども。貧乏にて自
から給へば。人皆之を易と看。獨り百合は心に之を奇
とす。終に女を以て之に妻はす。女亦其夫の爲を所
を見て。頗る畫を善く。夫妻終日紙を展べ墨を舐り。

琴酒相娛み、金甌塵を生るゝに至れども晏如たり。百合視て大に喜び曰く、吾事畢る以て瞑まべしと。既に
て病死を其後池生は書畫を以て名を海内に成を
即ち大雅先生といふもの是有り。女を玉蘭と號し亦
先生と名を齊く。時の人之を伯鸞と孟光と比す。
有竹子曰く、百合は茶肆の一女子あり。而して其明眼
炯々炬の如く、能く徳山某と流寓の中に識り、池生在
落魄の間は鑒し、皆其見る所は背かた。他日各家を爲
まに至る、其明其識決して尋常人の及ぶ所にあらば
亦是一個の賢女子あるを。

第廿四 貧女衣を佛前にお供して其誠意を表する

事

我國の舊俗、陰曆七月十五日、即ち中元の日を以て、父
祖の神を祭る之を魂祭と謂ふ。一貧女あり、是日先父
母の爲め、佛にお供養せんとせれど、窮困して膳を
設くるおと能はず。唯一綾衣を存せり。則ち其裏を解
去りて、之を小甕に納む。覆ふに荷葉を以て、自から
携へて一寺に入り、恭しく之を佛前にお眞を拜伏、涕泣
して去れり。荷葉の上は一首の倭歌を題せり。其詞お
云く、奉つる蓮の上の露ばかり、是をあらはせとみよの
佛よ。

有竹子曰く、凡そ神佛にお供するところ、あるは其物の厚薄

にあらば、其誠の浅深は在り。況や祭祀の禮は、只是尊卑、其分を随ふべきものなるに於てをや。諺に所謂貧女の一燈は、富者の萬燈を如く。今此貧女の一衣、能く其敬を致して、餘あり。真情和歌に見はれ、鬼神をして感格せしむるに足れり。世の貧を以て口は籍き、其祭祀を怠り、其誠意を盡さざるもの之を見て少く省る所あるべし。

第廿五 孝婦不慈の舅事へて其志を違はざり
一事

備前國窪屋郡三田村の農夫久兵衛の妻某、此家に嫁してより、奉養心を盡して、備に艱苦を嘗みり。久兵

衛父あり、年已も老て、氣甚だ短く、婦を遇するおと暴虐ありて、動もせしむ之を鞭撻するおとある。婦少しくも其意を悖ふおとなく、甘んじて罪を受け、務めて老人の意に随ふ。平生老人の行歩は艱むを以て、婦其起居を扶けて、晝夜を舍てず。然るに一夕、婦太く困睡して、老人の起るを知らざりければ、老人怒て木臼の中は、洩れ婦目覺めて、のち之を知る。いへども而も顔色にさへ見はさず、深く以て己を罪し、老人の顔解くるを待ち、退て徐かに其臼を洗淨し、老人をして少くも之を知らしめ、其婉婉聽従するおと率ね此の如し。誠意の至る所、鬼神猶之を感應を、況や同氣の人類を

や如何に頑固なる老人も、早晚婦の孝心に感動せられて、自から其頑を悔ひ、遂に善く婦を遇ふに至り、其頃偶郡縣を巡視するの官吏、婦の門を過るあり、老人出て拜し、之を語るに、婦の孝狀を以てせしに、官吏亦大に感ず、之を國王に申し、乃ち優賞を下賜せられぬ。

有竹子曰く、父慈するに子孝あるは、此常の事、固は道ふに足らば、唯父母我を使ふに、非理を以てするの逆境に遇ひ、之は事へて、其孝を失ふざる、是れ此真の孝子と謂ふべし、夫れ人の子婦となりて、此少の責罵に遇ふも、猶且之に堪る能くば、妄言謾語、父母に抗

し、一家相容れむとて、遂に其乖離を見ざるに至るもの、此婦の孝志を視て、深く猛省せざるべけんや。

第廿六 明智氏難に臨み節を改めざる事

明智氏は細川忠興の夫人なり、日向守光秀の女なり、慶長五年石田三成名を幼君を輔翼せんといふふ托して、列侯士大夫の婦人女子を捕へ、悉く質として、大阪に居らしめんとせしが、時、忠興は徳川氏に従ひて東に在り、三成使者を忠興の家遣はして曰へるやう、早く妻室を城中に質として、忠興が一族の安泰を圖るべしと、忠興の家令河北石見等之を夫人に告ぐ、夫人答へて、所天忠興は已に徳川氏の命に應じ

て關東ふ在り。吾は其夫人とて、如何んぞ大阪ふ從ふべき。況や石田の意、真は幼君を輔くるものにあらず。ををや。夫れ盛衰を以て節を改めざるを以て心を易へざるは、武士の家法あり。吾愚かりといへども、幸ひは武士の家ふ生れて、妄りに其家法を辱しむべけんやといふて、三成の命は應ぜば、三成怒りて、數百の兵を發し、其宅を圍み、め之を脅かせしに、夫人屈せむ。首を引きて、自から刺し、硝火は投じて死す。家令河北等亦皆腹を割き、其阿母侍女も、同く火は投じて死を視る。おと飯るが如し。是より三成敢て其餘の將士の質を收めむ。

有竹子曰く、烈女の二夫を更へざるは、忠臣の二君に事へざるに似、其事一なり。今明智氏の如き、一旦不慮の變ふ會し、泰然之は處して、其當を失ふべし。能く烈女の節を守りて、忠臣の義を全ふは、武士の家法を辱しめざるは、名を竹帛に垂る。是所謂歳寒くして松柏の後れて凋む。我知り、世亂きて、真の英雄を見るものなり。て亦一世の女丈夫と謂ふべし。

第廿七 阿婉刀を揮ふて賊を斃せし事

出羽米澤の士人某の女阿婉といふものあり。某後ハ禄を辭して、江都に移住し、醫を以て鳴り、治を求むるもの。日夜門は絶へず。列侯或も給する。お月俸を以て

あるものあり阿婉早く母を喪ひ一人の妹と共に父
より従ふて居り一々一夕夜半ふ人あり遽しく門を叩
きて其家人の病勢甚だ危きを告げ父より來り診せん
おと成請ふ父急小装を趣く趨つて之と俱に往き獨
二女のみ家を守れり時小隣近の少年主人の在らざ
るを窺ひ二女の能く爲るを羨し四人群を爲
し門を排して入り米菰を擔ふて去らんとて阿婉此
時年十六妹も僅に八九歳ありける然るに阿婉之を
視て憤怒は堪へず妹も語つて曰やう吾は柔弱の一
女子といへども賊の吾室に入つて恣に吾粟を奪ふ
を坐視しあがらざるを枕をるおと能くせんといきへ他

日何面目あつて人を見んや殊に阿爺も剛嚴の名を
以て世に聞えたる人おれば吾の賊を見て畏縮し手
を出る能はざりといへむ必だ大に譴責せられん
因て吾將さ小身を以て賊に當らんとおれば汝等が
に此中にお在つて微く其戸を開きて之を瞰ひ阿爺
の飯を待ち具さに其見る所を陳べし吾は屬柔
力なきの一婦人あるがうへに一人の寡きを以て四
人の衆きに敵し萬々生を得るの理あり吾死するの
後汝も因つて其事を阿爺に傳ふるを得れば更に遺
恨とある所あらばとて妹を度闇の中にお匿し身ハ刀
を提げて潜か小側戸より出で玄關の外にお伏し一賊

の米を負ふて出る。然見て直ちに進で刀を其腹に刺し、
立ふに斃る。後猶一賊あり、其跌を僵るもの
と思ひ趨つて之を救むんとする。又之を刺して
同く斃る。是より於て他の一賊は始めて暗中に人あ
るを覺り來つて將さふ已を捕へんとむ。阿婉又
刀を揮ふて之を撃ち其一臂を斷ち、書然地を墮ちて
聲を爲む。餘の一賊之を聞て逃去らんとむ。然追撃
して又之を傷つけ遂に能く四人の賊を死傷し而して
阿婉の身も微傷をも負はざり。少時して父方
さに飯り之を聞て大に驚き事町奉行に聞ゆ。奉行其
義勇を奇り賞むるに銀錠を以て。且死傷者の家

に嚴禁して之が仇怨を爲さざらめたり。
阿婉盜を斫るの刀は左文字にて其父の米澤に在
るとき曾て君の賜ふ所のものなりと云ふ。

有竹子曰く阿婉も纖弱の一小女子にして然も事倉
卒の際に當り智を運らば策を盡し泰然之に處して
恐懼の氣なく狼狽の色を見ず終に能く四人の賊を
死傷し其胆畧奇拔鬚眉男子も猶遠く及むざるあり。
況や孱柔の女子をや。前條明智氏の事義に則ち義烈
は則ち烈ありといへども彼も戰國の世に方りて常
に干戈倥傯に慣れ且之を佐くる人あり之に處を
るに餘地あり此阿婉が急遽變に應じて優容動かざ

るの勇烈無比なれば甚だ彼の稱するに足らざるが如きを覺ふ。吾今將きに之を稱して、女丈夫中の女丈夫と謂ふんとするあり。

第廿八 銀女孝貞の道を失ふ事

泉州堺神明町東一丁に紡糸の業を營み、僅に其口を糊する勝原銀女といへるものあり。初め此家は嫁せし頃は手廣く油商を營み、貧しからぬ生業あり。其後夫重次郎中風症に罹りて、復家業に従事する能はず。是より先き姑も同病して床に就き、兩人齊しく枕を列べけるより、藥餌其外多くの費用を要するが爲め家産次第に傾きて、今は見る影もなき哀れ

零落の様とありけるのみ。兩人の病は難症中の難症にて、起居は元より吾手にて物持つあときへ自由あらざるに、銀女も更に倦める色なく、晝夜看護の力を盡して、兩人の傍を離れず。或は病人の望み依り、交る交る之を負ふて浴湯に連行し、頭部より足の底まで丁寧に洗ひ、或も艷陽三月の候和風暖日、人皆家を出て遊歩を試むるの時、小當れば病人を負ふ花の下に心を樂ましめ、務めて之を慰むるを以て事とし、然るに此姑は元來評判の氣六ヶ敷き人あるに、病後殊更短氣を加へ、些少の事小腹を立て、常に高聲を上げ罵詈するに、一へども銀女は能く之を承けて、其意

に悖らぶかに由り、姑後かへ自から悔ひて、其過を謝
むかか至り。近隣の人も皆其孝貞を稱へて、感嘆措か
ざりしが、程なく姑は終る鬼籍に入り、其悲嘆の涙の
未だ乾かざるに引續きて、夫重次郎も亦同く此世
を去りければ、銀女の愁傷譬へんか物なく、同ト道か
とまづ、か泣嘆ちりを近隣の人も慰められて、漸く野
邊の送りを營み、其後も只心を傾けて、亡き人の菩提
を吊ひ、夫と姑が長々の病氣の爲に傾きたる家政
を回復せんものと、専ら職業に勉強し、此家か嫁して
より、二十年の間、其大半は病人の看護か心力を盡し、
病人の死後、一家の生活か労働を費して、始終一日

の如く、毫も怠るおとのあらざりける。

有竹子曰く、銀女の事も、別か論むる所なく、只是一片
の孝順と貞實とのみ然れども、此孝貞の外、復婦人
の美德善行といふものあらば、婦人として已に此徳
行を具ふれむ。復他に何をか求めんや、世の龜鑑たり。
模範たるべきを、即ち這個孝貞の二字に在るあり。

第廿九 鈴木某の妻衣服頭飾を捐て飢者を救ひ

一事

出羽庄内か鈴木宇右衛門といふものあり、常に儉を
守り、施を好みしが、偶天明卯年の凶荒に際し、餓草道
路か相望む、宇右之を見て慨嘆し堪へず、乃ち家財を

盡して窮民を救ひけしべ。其妻も亦愛する所の衣服
頭飾を傾けて之に贖し更にお客む所あり一日夫お謂
へるやうは昨日篋底を探りて猶一襲の衣を得たり
請ふ鬻ぐで以て救助の資お充んと。宇右之を止めて曰
く。婦女の尤も愛するところは衣裳あり然るお卿今
棄て顧みざるの志。洵お嘉みまべけれども他日門を
出るに惡衣を着て晝行くは心お耻る所あらんと。妻
曰く。妾も亦之を思はざる。おあらば去れど衣服頭飾
の如きは復た購求し得べし人命は貴重なり決して
是を以て彼お換ゆべからば凶荒已お此に至り人々
朝夕を保たざらんとするの今日に於て妾獨何の顔

あつて錦繡を衣綺羅を服して市街を徘徊せんとい
ひて遂お悲く鬻ぎて飢者お與へける。又一日大お雪
降り天甚だ寒し時お幼兒ありて門外お立ち食を乞
ふ之を視るに敝衣肩を露し面目憔悴復た人色あ
ら。妻乃ち丐兒を指し其女兒お語り曰く。汝彼の丐兒
を觀むや。汝と年齢畧同し而して慘狀此の如き甚だ
憫むべし。今汝も襦袢を重ねたれむ凍且飢るに至ら
ざる宜し。其一衣を脱して彼の肌膚に覆ふべし。汝お
在ては寒を忍ぶお過ぎに彼お在ては則ち蘓生せん
汝之を思わざるやと聞て女兒も欣然一咲衣る所の
衣を脱して丐兒お與ふ。夫妻相顧て覺へむ涙を垂れ

たりや云ふ

有竹子曰く、婦人の衣服頭飾を於けるは、猶昔の武士が兩刀を於けるが如く、之を以て其魂とあり、毫も其身を脱せざらんとするは、蓋し普通の常情あり、然るに今鈴木某の妻へ、其以て魂とある所のものを脱て、人み與ふるあと、猶敝きたる屣を棄つるよりも軽く、帝に義を見て利を忘れ、窮民を救ふあとを知て、其他を知らず、殆ど尋常人の及ぶべからざる所のものあり、亦是一個の偉女子あるか。